■北海道情報大学学内報

# ななかまど

NANAKAMADO

● 目　次 ●


新学年を迎えるにあたって　三枝学部長…… 2
大学院への期待　眞野研究科長…… 3
海外訪問記　小林助教授…… 4
トピックス…… 5
新春座談会…… 6～9
ABI/INFORMデータベースの紹介…… 10
就職状況について…… 11
教職員の動向…… 12
12～3月主要行事…… 12
編集後記…… 12


発　行・北海道情報大学
〒069 江別市西野幌59－2　TEL 011－385－4411　FAX 011－384－0134

# 新学年を迎えるにあたって

学部長　三枝武男

平成元年に誕生した本学も9年度を迎え、来年は10周年記念行事も計画される一区切りの時期が到来して感慨一入です。

昭和年代の終期には何もなかった北海道開拓に由緒あるここ野幌に本学が誕生し、既に5期生を世に送り、この間に平成6年度には全国ネットでの衛星通信教育を含む我国初の情報系通信教育部が発足し、今年度で最初の卒業生を出すまでになり、更に平成8年度から大学院が開設され、早いスピードで充実の度を増しつつあります。この間に学術研究の高度化と人材養成・需要の変化・高等教育進学率の高まりと学生の多様化・生涯学習ニーズと大学に対する社会の期待の高まりと時代に即応した大学改革が進められ、カリキュラムの改訂も行われ再度見直しの時期に来ております。

我国が今後あらゆる分野で活力を維持し積極的に世界に貢献していくためには、大学の役割はますます重要であり教育研究の高度化・高等教育の個性化が望まれます。

我国の大学・短大への進学率は益々高まり（高卒者の約半数）高等教育の大衆化時代が到来し、逆に18才人口は平成4年度（205万人）をピークに減る傾向（平成8年度170万人余）が予測され、質的な充実が望まれます。

経営情報学系大学・学部・学科の増設が続き、本学の存在価値と共にきびしい競争の時代に入ってきました。教職員・学生一体になって大学発展の為に力を尽くして行くべきでしょう。

今世紀はめまぐるしい歴史を経て21世紀に続こうとしております。

日本国内の充実はもとより国際的交流は更に深まって行くと思われます。例えば米国がアジアに膨大な人材ネットワークを持っており、私も訪問した事のあるスタンフォード大学はサンフランシスコの南方近くに位置し、いわゆるシリコンバレーの回りにスタンフォードを中心とした非常に多くの会社・ベンチャーがあります（大小7,000社もあると云われている）。

スタンフォード大学と企業との密接な協力のもとに発展し、ここで育ったアジア系の人々が本国に帰って第二・第三のシリコンバレーを作るという動きが出てきています。

日本は経済成長と共に米国と肩を並べ国際的優位性を維持して来ました。

しかし、米国・日本他に留学した韓国・タイ・シンガポール・中国等アジア系諸国は急速に追いつこうと発展を続けております。

私もかつて前任の大学でタイやシンガポール等の留学生を教えましたが、その後韓国・中国・タイ・シンガポール等を訪問し、彼等の活躍ぶりやアジア諸国の発展振りを見聞し、21世紀は国際的に更に中国・インド等中心にアジア全般が共存発展の時代が期待されると思われます。

本学はＴＡＯ（通信・放送機構）を通じて中国の南京大学やタイのモンクット王工科大学と昨年7月から国際的衛星通信教育を実験的に実施しております。文部省も関東一円しか及ばなかった放送大学を衛星通信教育で全国ネットの教育を近く開始する運びになりました。

学習塾ナガセはディジタル衛星放送で中高生向けの学習番組を本年4月から開始と発表しました。

本学は松尾理事長先導でマルチメディア、インターネット・イントラネット時代に即応したジェームス・マーチン博士提唱のインフォーメーション・エンジニアリングや新ネットワーク論・オブジェクト指向導入のソフトウェア論等で特徴あるカリキュラムを組み時代の流れに沿った教育研究活動を先駆的に推進し、歴史の浅い本学の地位を確固たるものにしようとしております。

本学は年と共に更に充実して行くものと思われます。教職員、学生共々新時代を新たな発展を期待して駆け抜けて行ければと願っております。

# 大学院への期待

経営情報学研究科長　眞野　脩

現在の日本は、大きな転換点に立たされております。私たちの前には、健康産業分野、福祉産業分野、リサイクルに代表される環境産業分野、個人の資産運用を中心とする投資コンサルティング分野、宗教・芸術・娯楽に関する諸産業分野、生涯教育を対象とする教育産業分野と言った多くの人々の認める肥沃（ひよく）な新市場が広がっております。同時に超ＬＳＩに見られるようなエレクトロニクス関連分野、携帯電話に代表される通信機器の分野、太陽電池に見られるような新エネルギーの開発分野、セラミックに代表される新素材分野、遺伝子組み換えに見られるような生命科学分野等の諸研究分野では、多くの新しい発見や発明が次々となされております。

多くの新技術や新素材が提供され、新市場のあり処が判っており、かつ市場金利は史上最低の水準となっておりながら、オイルショック後のような新製品の創出は殆ど行われず、景気の力強い回復が見られないと言うのが現在の日本の状態です。従来からの経済社会の在り方が限界に来たと言われるのも当然です。

わが国のように天然資源の乏しい国でありながら、世界で最も高いレベルの所得水準を維持しつつ、今後の高齢化社会を乗り切って行くためには、私たちは従来にもまして社会全体の効率化と高付加価値化を図って行くことが必要であります。しかし残念ながら、わが国の農業、流通業、運輸業の効率の悪さは国際的にも周知の事実であります。したがって、従来の日本を支えて来たものは、製造業を中心とした日本経営の効率の高さと高品質でした。この日本の経営の優秀さが国際的に注目された1980年代に米国は、一生懸命に日本の経営の研究を行いました。その結果、彼等が注目したのは、日本の経営構成員の間に見られる情報の共有化現象と、関連する企業間をつなぐネットワーク組織の有効性でした。彼等はリエンジニヤリングと言う名称の下で、この日本の経営に見られた特徴の導入に努めました。そしてその際の有力な用具となったのがパソコンであったのは周知の通りです。彼等はパソコンのネットワークを通じて、日々の活動に必要な情報の共有を図り、今や日本の経営の効率を上回る成果を上げ始めております。農業や流通業・運輸業に見られる米国社会の効率の良さは、今更指摘するまでもありません。

それならば私たちは、米国のやり方を真似れば良いのでしょうか。どうもそうではないようです。1950年代から60年代にかけて、わが国は米国の経営技術や技法の直輸入を行い、手痛い失敗を重ねました。やはり日本では日本人の精神構造に適した方法を開発して行かねばならないようです。事実、私たちは米国のように大きな貧富の差とそれに伴う社会不安を生み出している競争社会は好みません。貧富の差の小さな落ち着いた静かな社会が、本来の日本人の生み出した社会であったはずです。情報の共有化がなされるネットワーク社会の特性を生かしながら、同時に開かれた競争社会の利点をも取り入れながら、日本人の感性に適った社会の創造と言う一見、矛盾した要求に応える社会を創造しなければならない訳です。

こうした要求に応えるためには、従来の枠にとらわれない多くの若い独創的人材が育成され、彼等による新しい試みが行われることを通じて、新しい知識の体系が創造されることが必要であると考えられます。特に従来からの科学的研究の主流は、認知でき、かつ記号化ないしは数量化できる情報の処理に偏っており、認知できず、記号化され難い社会的・政治的あるいは情緒的・倫理的な問題の処理は、極めて不十分な取扱いに留まってまいりました。しかし、世界が直面している問題の多くは、実はこうした分野に集中してきているとも言えます。そして、こうした難問の解決には米国のリエンジニヤリング運動や複雑系科学の研究に見られるように、情報関連の諸知識の体系が重要な機能を担うであろうことは、今日広く認められている処であります。北海道情報大学の大学院は、こうした新しい分野にも挑戦し得る幅広い知識と関連諸技術を修得した応用力に富んだ人材の育成を目指して行きたいと考えております。関心のある方々のご協力をお願いいたします。

海外訪問記

# 留学残酷物語

経営学科　助教授　小　林　世　治

――昨年4月から半年、イギリス・バーミンガム大学に留学しました。その時の私の生活ぶりを、以下の文章から想像してみて下さい。

留学は、外国に行って勉強するとは名ばかり、内実は日頃の繁忙さから逃れ、異国情緒を楽しむ「遊学」と、相場が決まっていました。では私の場合はというと、遊ぶどころではなく、また落ち着いて勉強することもままならぬという、中途半端な状態でした。そんなに多いケースではないと思いますが、一般（？）家庭に下宿したことが、その原因だったようです。

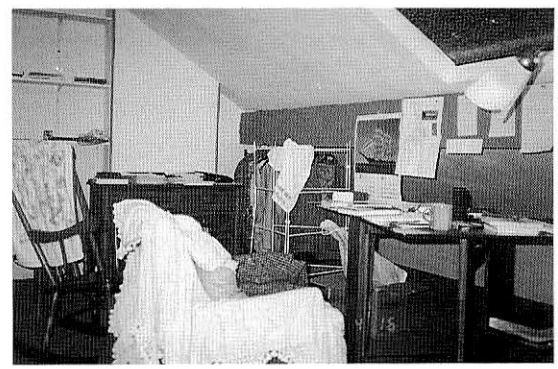
当初予定していたB＆B（朝食付き民宿）が、手違いで1週間しか居られなくなったのが、そもそもの始まり。次の宿泊先を思案投げ首で、とあるパブに1人ビールを飲んでいたところ、2人の中国人に声を掛けられ、その下宿を紹介されたのです。少々小汚く、狭い屋根裏部屋（写真参照）だったのですが、大学に近く買物も便利なため、そこに決めました。最初は、気兼ねが要らずリラックスして勉強できると喜んでいましたが、しばらくすると、どうも様子がおかしい。宿の男主人が居ないのです。

そのうち同宿の台湾人（例の中国人の1人）に聴くと、She is in the progress of divorceだとのこと。そういえば家庭内の雰囲気が妙にトゲトゲしい。子供達はしょっちゅうケンカするし、荒げた長男の声が異常で獣のようだ。これ以上は一家のプライバシーに関わるので詳しく書けませんが、そうした精神的ストレスに私自身が巻き込まれ、少なくとも2回は宿の女主人と口論＝ケンカになりました。イギリスでの離婚率は3割を超える（彼女の話）ので、離婚家庭に下宿する可能性はそれほど小さくない。否それどころか、他人を下宿させる家庭には、何か事情があると考えた方が正しいのです。

しかし、その反面として下宿の女主人は、彼女なりに精一杯サービスしてくれました。たとえば、スコットランド旅行の際、エジンバラでは友人宅、そしてフォート・ウィリアムスを案内したのち自宅に、タダで泊めてくれたのです。少し打ち解けてきたある晩、一緒にワインを飲みながら、彼女の口から自身の破綻した結婚生活を語ってくれたこと、今ではなつかしく思い出します。

そんなこんなで、濃密な人間関係――後に入ってきたフランス人とも――に入り込み、起伏の大きな半年を過ごしてきました。先の2人の中国人だけでなく、周囲の人々は私を学生か、せいぜい院生くらいにしか見ない風で、気安く（？）つき合ってくれました。また私の方も、慣れてくると自分の感情を素直に出せたので、不思議です。イギリスに行って若返ったような気がするし、多少の冒険＝失敗もしたので、もう一度「青春」したのかも知れません。今となっては、アリガトウ！

学生諸君には、留学中こんな経験を薦めたくはありません――ちゃんと勉強に集中して欲しい。しかし、長い人生の中で時にはこんな濃密な人間関係があっても良い。いや、なくては困るのです。テレビで話題の猿岩石が、どれほどの滞在経験をしたのか知りませんが、1ヶ所に留まった場合とそうでない場合とでは違うでしょう。学生生活4年間（＋α）で、それに負けない起伏のある「青春残酷物語」を味わって欲しい。イギリスで出会った人々は、生身の人間でした。



# トピックス

## 第５回 卒業式を挙行

３月18日(火)午前10時から第５回（平成８年度）卒業式が本学体育館において挙行された。

今年の卒業生は、経営学科121名、情報学科103名計224名であった。

式は開式の辞で始まり、卒業証書は経営学科代表金内陽典君、情報学科代表高橋千佳子さんに授与された。学長の告示、学校法人電子開発学園理事、株式会社SCC代表取締役社長松尾泰氏の祝辞に続いて、卒業生を代表して情報学科の田中秀和君が卒業生答辞で北海道情報大の卒業生であることを誇りとして本学の伝統と名声を社会の中に広めていく、またどのような困難にも諦めることなく堂々と立ち向う決意を述べ巣立って行った。

## 学生部長杯 行われる

昨年12月21日(土)13:00より、本学体育館で学生部長杯テニス大会が開催された。この大会は、今回で２回目を迎え、テニスの好きな教職員・硬式庭球部員が浅岡学生部長を中心に楽しい一時を過ごそうと、企画したものである。

競技は教職員チームと学生チームの７戦の対抗戦で行われ、初戦から３戦までは20代から60代後半から成る教職員チームが学生チームを圧倒、円熟したベテランパワーを遺憾なく発揮した。４戦以降は、徐々にエンジンがかかってきた学生チームの若いエネルギーが爆発、逆襲に転じ接戦をものにし、硬式庭球部が優勝。トルフィーを手にした。

# 新春座談会

## ～北海道情報大学に学んで～(上)

日時：平成９年２月13日(木)13時　１Ｆ会議室

編集委員
平子先生

梅津先生

田中先生

廣奥先生

編集委員
伊藤先生

経営（浅岡ゼミ）
池田　亮君３年

情報（中岡ゼミ）
白田宏巳さん３年

教養（玉置ゼミ）
吟実千子さん２年

情報（中岡ゼミ）
米澤卓治君３年

教養（奥平ゼミ）
本間　歩君２年

経営（田中ゼミ）
橋本昌英君４年

**平子先生**　本日はお忙しいところ、座談会にご出席下さいまして有り難うございます。今日のテーマは“北海道情報大学に学んで”ということで、皆さんにお話ししていただくわけですが、それに先立ちまして、このテーマを立てました訳を少しだけお話しさせて下さい。

本学は、開学が1989年だったわけですが、1993年から、第１回卒業生を送り出し、この３月には５回目の卒業生が出る事になっております。創立以来、ちょうど３月で、まる８年が経過しつつあります。この間、カリキュラムの手直しなども、行われて来ているおり、こうした経緯を踏まえて、本学の教育の在り方を総括してみる事が必要なのではないかと。これは勿論、教員の側では既に行われつつあるんですが、その際に実際本学で学んでいる学生の方たちの、生の声を是非聞いてみたい、そしてそれに対して私達教員の側も、思うところを述べてみたらどうだろうか。教育というものはやはり、教員が学生に“知”を一方的に与えるというものではなくて、学生から教員に投げ返されるものを含めて考える必要があると思いますし、両者の対話の場が必要なのではないかということで、こういうテーマを立てさせていただきました。そういう訳で、今日はざっくばらんに、個人としての意見を積極的に述べていただきたいんです。色々な角度から話題にしていきたいんですが、一つは、この大学に入りますと、一般教育課程というものがあるわけです。１年生の時は、この教養の授業がおそらく中心になるわけですけれども、講義中心の授業ですね。皆さんは、どのような意見、感想をお持ちなのか、まず学生さんの方から口火を切っていただきたいと思います。

**本間君**　あまり違和感なく自由に受けられたので良かったと思います。

**吟さん**　講義を受ける形式の授業が多くなってきたんですけれど、自由なスタイルで授業を受けられてすごく良かった点もあるんですけれど、授業に集中していないと話が進んで行っちゃって、終わってみると、自分は何を学んだのかわからなくなる授業も多かったので、あまり私は好きじゃないです。

**田中先生**　そういう時は、質問はしないのですか？

**吟さん**　質問をしに行けばいいんですけれども、私もあまり授業に熱心ではないんで、中途半端な位置にいる生徒なんで、行かないで、何もわからず終わってしまうんですよ。

**田中先生**　その場で質問をしてもいいんでしょうか？あなたの受けられた講義では？

**吟さん**　いいんだと思うんですけど、みんなの前で質問することは中々出来ないんで、そのままになってしまうんです。

**池田君**　ゼミで、少人数の講義形式で授業を受けているんですけれども、質問しづらい雰囲気があるんです。大きな教室だと200人位の単位になりますけれども、小・中・高と質問をしないで授業を受けて来た中では、まず無理な話だと思うんです。

**廣奥先生**　なぜ無理なんでしょう？小・中・高と同じと言うのなら、授業中に、ジュースを飲んだり、お菓子を食べたりというのはあり得ないですよね（笑）。何故質問だけはできないのでしょうか？

**池田君**　人前で発言するのが恥ずかしい、特に明確な理由があるわけではないですが、そういうふうに思い込んでしまっているというのが一つあると思います。人が発言するとやっかむみたいなものが、一部にはあるような気がするんです。少人数だと発言出来るんですけれども、200人とかなると、僕は、出来ないですね。

**平子先生**　多人数の講義の中で中々質問出来ないという意見が学生さんの側から出ていますけれども、もうちょっと話を戻して、一般教養の講義の中身については、皆さん、どんな感想を持たれたかというのが聞きたい点なんです。先程、

本間君が、高校時代の延長のような感じを持ったと言ってましたね。その点では皆さん、同じように感じているのでしょうか？

米澤君　僕は高校時代、国語が全然ダメだったんで、この大学に来て、文系の文学とか哲学とか話を聞くと、普通の高校の国語よりはくだけた考え、わかりやすい考えで、色々説明してくれるので、高校の時よりも好きになったかなという感じはあるんですけれど。

平子先生　他の方はどうですか？

橋本君　そうですね、大学での一般教養というのは、本当に専門的なところまで教えてくれるのは良かったですね。でも、1・2年生の時は一般教養が多かったので、その分、情報大学としての専門の分野の学問があまりに少な過ぎると思うんです。3年生になってゼミの選択をする時に、自分のやりたい事が何だかわからずに、ただ、いいゼミだなというのに入ってしまって、卒業しちゃうような事があるんです。

白田さん　高校の時は受験勉強のような感じがしていたんですけれど、今は楽しく勉強できるから内容としては良いと思います。それに、専門の内容が少なすぎるって言ってましたけど、あまり多すぎると戸惑ってしまうので、楽しく勉強しながら、専門的な事も少しずつ取り入れていければと思います。

平子先生　梅津先生は語学を教えていらっしゃいますが、何か感じていらっしゃる事はございますか？

梅津先生　ドイツ語の授業の場合は、みんな0（ゼロ）から出発するという感じで、学生はみんな新鮮な感じで受けてくれているんですけれども、質問が少ないですね。なるべく質問するようにと言っているんですけれども、人前で喋ることに慣れていないというか、わからない所があっても質問してこないというか。もう少し活気があってもいいような気がします。

平子先生　他の先生方で、一般教育の在り方について、何がご意見がございましたら発言していただきたいのですが。

田中先生　一般教育を2年間受けて、これで人生観が変わったとか、そこまで行かなくても、感動したというようなものを挙げていただきたいんですが。

池田君　英語が大きく違って感じました。外国人の先生に教わる授業がすごく新鮮で、感動しました。高校までの英語というのは文法、読解ばかりで、英語は嫌いでした。大学の英語はとても楽しくて、ほとんど欠席なく授業を受けていました。

平子先生　もう少し、感動した理由を聞きたいんですが、それは高校までの受験教育のための、文法などの詰め込む授業ではなくて、どういう点が違うのでしょうか？

池田君　コミュニケーションをとる為の手段としての英語や、2年生の時のビジネス英語等でやった、FAXの書き方みたいなものは、実際に使っています。僕はインターネットをやっているので、電子メールのやり取りをする時に、そのFAXの使い方を真似して使っていますし。

米澤君　やはり大学に入って、福田先生とか、ソーラー先生に習って、例えば外国に行っても、日本で習う文法的な英語だけじゃなくて、単語だけつなげても通じることが少しわかりました。実用的な英語ですね。

平子先生　英語以外に何かあれば。

白田さん　広瀬（平子）先生の歴史、すごくおもしろかったです。受験の時は、日本史、世界史とか地理とか、そういうものしか覚えませんでしたが、社会的なもの等を勉強したので、身近に感じられてすごく興味がもてました。

平子先生　みなさん、受験でがんじがらめにされて来た中で、そうではない学問に触れると、新鮮さを感じるということかなと思います。

3年程前から教養ゼミを2年生からスタートさせてますが、これは選択という形を取っています。そういう教養ゼミを含めて、ゼミナール形式の授業に参加してみて、どんな感想をもっているか、という事を聞かせていただきたいと思います。初めに、専門ゼミの方から話をもっていきたいのですが、どうでしょうか。

池田君　僕は、浅岡先生を大変に尊敬する先生だと思ったので、ゼミの内容は二の次になって浅岡ゼミに入ったんですけども、少人数で、そして親しみのある先生と近い関係で学べるという点が良いと思っています。

橋本君　ゼミになると、自分の分かりやすい所から入って行って、皆の意見を聞いて、講義よりも本当に身につく授業ですね。ゼミは今、週1回しかないですよね。僕は田中ゼミなんですけれども、いつも大体1時間半じゃ終わらないですよ。時間が少なすぎるというのが受けて来た感想です。出来れば週2回くらいあっても差し支えないんじゃないかと。

米澤君　僕が所属している中岡ゼミでは、自分たちで自主的に勉強して、毎週当番を決めて、毎回その人がその内容を説明するという方式を取っていたんですが、先生は後ろで監督者のように見ていて、先生が出れない時は、ゼミの先輩が細かい質問をしたり、自分たちで勉強していくという方式を取っていました。先生は本当に重要な所だけ教えてくれるという感じでした。それと、うちのゼミは水曜日と木曜日に分けて行っていました。

平子先生　それは実質、2コマやっているということですか？

米澤君　そうです。

平子先生　同じゼミの白田さんはどうですか？

白田さん　自分一人だと中々勉強が出来ないことを教えてもらっているので、良かったと思っていま

す。

**平子先生**　専門のゼミをもたれている先生もいらっしゃるので、先生サイドから、学生をゼミ形式の授業で教える時にどんなふうに感じるのかということをお話しいただければと思いますが。

**伊藤先生**　私のところも、中岡ゼミ形式でやっているんですが、あまり私が口を出さないようにしているんです。それは、自分で苦労して勝ち得たものというのは育っていくと考えるからです。学生時代に、ゼミ担当の教員に質問をしに行ったんです。そうしたら、「この本を見ればわかるよ」と言われて読んだんです。やっぱりわからなかった。それでもう1回、教えてくださいと先生のところに行ったんです。今度は「それはこっちの本を見ればわかるよ」と。私は、その先生は忙しくて、人に本を紹介して逃げたんじゃないかと思ったんです。ある時、その話を先生に言うと先生は「君は卒業したら、どうするんだい？私のところに尋ねてくるのかい？君は、わからないところを自分で解決する方策を知らなくちゃ行けない。」と言われました。ゼミというのは先生が教えてしまえば、ほんの5分で終わってしまうようなことも、2週間、3週間かけて、自力で到達するというのが、意義があるというふうに思います。

**廣奥先生**　僕のところは、卒業論文が非常に実践的な、プログラムをかくということになりますので、コンピュータの前に座って、作業をするというふうになって、その中で必要になってきたものをどんどん言いなさいという感じで消化しているつもりなんですけど。そうなってきて、学生さんからここがわからないという質問が出て来るんですよね。少人数でやる良さというものを感じます。

**田中先生**　情報学科のゼミの持ち方は、社会科学のゼミの方向と若干違うんではないかというふうに思います。社会科学の場合、私のゼミは全部、テーマなんですね。ゼミは思考の訓練においています。なんらかの形で大脳の回路を繋ぐんですね。1回繋いでおけば、その同じようなテーマがきた時にその回路が、うまく機能する。繋ぐというのは知識の伝授では繋げない、それは一方通行の講義ではダメだというふうに君らが思っているとおりなんです。君らが発言しないと繋がらないんですね。これが僕はゼミナールのものすごい大きな役割ではないかというふうに自分では思っています。

**平子先生**　たしかに社会学系のゼミというのは違っているのかなという感触が私もしました。ただ、学生が学ぶということにおいて、ゼミナール形式がどういう意味をもっているのかというのが課題ですので、そこはまた次の機会に考えるべき問題であるという気がします。

少し、学年を下げまして、教養ゼミナールについて率直な意見を聞きたいんですけれども。昕さんは、中国語、本間君は中国事情ですね。それぞれゼミナール形式というのは初めてだと思うのですがどうでしょうか？

**昕さん**　受けてみて本当に良かったと思っています。1年生の頃から中国語に興味があったので、もう1年やってみたいと思っていたところ、ゼミで中国語があって、2年間、玉置先生に教えてもらったんですけど、先生は中国事情についても詳しくて、色々なことが学べて本当に良かったと思います。

**平子先生**　質問は活発に出ましたか？

**昕さん**　結構出ました。

**平子先生**　今、何人くらい？

**昕さん**　5人です。

**本間君**　ゼミは、負担も大きいのですが良かったです。また教養ゼミが、3年生の専門ゼミの準備だとしたら成功していると思います。

**平子先生**　負担が大きいけれども、良かったと思えるのは、どういう点でしょうか

**本間君**　自分で考えなければならない事が多いので、その過程がおもしろいと思います。

**平子先生**　思考していく過程ですね。中国事情というテーマをとおして、自分が得たものは、どんなものですか？

**本間君**　中国だけに限らず、日本に共通しているような問題が見えてきたという感じがします。

**平子先生**　教養ゼミは新しい試みなんですけれども、私も担当していまして、やり甲斐のあるゼミだなというふうに思っています。梅津先生もドイツ事情についてやってらっしゃいますよね。学生を見ていてどうでしょうか？

**梅津先生**　そうですね、僕の場合はドイツ語の授業もありますが、ゼミではなるべく人前で話す訓練、発表の仕方とか、そういう力をつけることになればと思っています。最初、ゼミとしてはもう一歩だなという感じでしたが、平成7年度の後期にやり方を変えまして、本を学生に選ばせて、司会進行係も全部学生にやらせたんです。その時たまたま、オウム真理教の事件があり、それがテーマと似ていた為、非常に学生の発言のノリが良くなって、主体的に自分の意見を人前で話すという状況が出来たので、非常に良かったと思っています。

**平子先生**　私は女性学というテーマでゼミをやっているんですけれど、学生に例えば新聞を読ませて、あるテーマについての記事をピックアップさせて報告させるとか、後期になりますとテーマごとにグループを分けまして、共同で報告させて、ほかのグループから質問、意見を述べさせます。最後に感想を書かせますと、非常に苦労して報告を発表して、ほとんど徹夜に近い状態で作って来て疲れたけれども、「やっと大学生らしい勉強が出来た」というような感想を寄せてくれる学生もいます。

次に本学のカリキュラム、授業の組み方、それからどんな資格が取れるかなど、意見、

要望があれば述べていただきたいんですが。

**橋本君**　情報学科は木曜日で、経営学科は水曜日と決まっているので、一つのゼミしか受けれないんですよ。出来れば時間帯を他の講義のように分けてもらえれば色々なゼミに参加できるのにと思いました。あと、カリキュラムでも、時間帯が毎年ダブるんです。今年受けれなかったものが、来年また同じ時間帯に入っているというのが結構多いので、受けたいものは3年がかりで受けなくちゃいけない。

**平子先生**　時間割に限らず、例えば経営学科であれば、経営情報学士という学士をもらうんですよね、それにふさわしい中身を自分は本学で獲得出来ているかという問題についてはどうですか?

**池田君**　自由の幅が広すぎて、〔§新カリキュラムになり、必修は少なく、ほとんどが選択科目である〕経営学科とは思えないカリキュラムを組もうと思えば組める状態で、そういうふうに取ってしまうと経営学科に入りながら、経営情報学士の称号に相応しくないカリキュラムになってしまうことがある気がします。

**伊藤先生**　でもそれは、いわば学生の自由ですよね?

**池田君**　そうですが、「これは嫌だこれは嫌だ」というふうに外していったら、もしかしたらそういうふうな学生も出て来るのではないかと思うんです。

**平子先生**　情報の方はどうでしょう、コンピュータを駆使出来る経営情報学士、プログラミングまで出来るというところに、おそらく高い水準をおいているんだと思いますけれども、今の本学の授業の中で、そういう能力を身につけることが出来るというふうに思いますか?

**白田さん**　私は取り方だと思います。一番最初に渡される手引きなどに、情報処理の試験など、対応する科目などを書いておいてくれれば、助かると思います。こういう就職先に進みたい人はこの科目をとると良いというのは書いてあるんですけれど、試験に対応するものは書いてないんですよね。

**米澤君**　僕は情報学科ですけれど、3、4年生になると経営学科の選択科目も取れるようになるので、僕は3年生になってからは情報学科の選択科目をあまり取ってないんです、経営学科の選択科目に興味があったんです。プログラミングがバリバリ出来るか、というとちょっと疑問ですけれど、情報学科にいたからといって、皆が皆、プログラミング出来るわけではないし、僕が勉強している、データベース、データを色々取り出して移動させたりする、そういうのもあるんで、情報学科にいたからといって皆がシステムエンジニアになるわけではないと思うんです。

**平子先生**　これについてはどうなんでしょう?情報学科というのは、学生にどういう力をカリキュラムの中で教えるのか、そのあたりは学生の話を聞いていると、個人個人で差がありますよね。

**廣奥先生**　情報学科だからといって、コンピュータを端から端まで使いこなせなくても、それはそれで良いんじゃないかという気がします。ただ、カリキュラムの中にプログラムなんかが入っていて、それを通して考え方を養っておいて、コンピュータというものを使わなくてはならなくなった時に、コンピュータ、あるいはソフトウェアに対する思考の方法が、知らず知らずのうちに身についているとは思うんです。

**伊藤先生**　同意見です。情報=コンピュータではないと思うんです。もし、=でしたら、情報学科ではなく、コンピュータ学科とか、計算機学科という名前がついてしかるべきであって、わざわざ情報という名前に置き換えなくて良いと思うんです。

**廣奥先生**　ただ、そういうふうに僕も言いましたけど、対、外部に対して、世間の評価は違うと思うんです。情報大学とついているのであれば、コンピュータに指1本触れられない状態、というのはやはり良くないと思います。しかし少なくともそれは、プログラミングがバリバリ出来るということではないと思います。でも、何かやはりクリアしなくちゃいけない。

**平子先生**　ちょっと話が情報の方に集中していますけれど、1、2年の時から実習科目がありますよね。コンピュータというのは全く不慣れな人間にとってはすごく恐ろしいもののような気がするんですが、そういう状況からは大学の実習を必修で取っていけば、脱していけるんでしょうか?

**池田君**　経営で1年の時に、“一太郎”と“ロータス”をさわりまして、2年の時のC言語は選択でした。今は、1年生の時に“WORD”と“EXCEL“ですか。あとは、2年、3年、4年はコンピュータにさわらないでも大学を出られると思うんです。情報大学なんですから、経営学科ももっとコンピュータをさわる機会を増やすべきだと思っています。友人にも、「コンピュータ、バリバリなんでしょ」と言われますし、そういう印象があるんですよね。経営学科も情報系というと大袈裟かもしれませんが、コンピュータを、一般の人よりは使えるところまではもってくべきだと思います。

**听さん**　私もその通りに思いました。私は2年生の時にプログラム言語を取ってないので、1年生の時にコンピュータを使う授業が終わってしまったので、さわる機会がなくて、一応自分でも買ったんですけど、やるのが“一太郎”ぐらいしかなくて、知識がないので、もう少し組んでほしいと思います。

〈次号に続く〉

# ABI/INFORMデータベースの紹介

経営学科　助教授　大　西　清　彦

図書室のカウンターの向かいにあるＩＢＭのパソコンでビジネス関連のデータベース、ＡＢＩ／ＩＮＦＯＲＭを利用することができます。このデータベースは、アメリカの大学の図書館などで幅広く利用されており、英語圏のビジネス関連の雑誌や新聞800誌以上を網羅した大規模なもので、記事抄録などを見ることができます。インターネット版とＣＤ－ＲＯＭ版がありますが、図書室にあるのはＣＤ－ＲＯＭ版ProQuestで1992年１月以降のデータより利用可能です。その使い方の詳細は添付のマニュアルに譲ることにしまして、ここでは利用の仕方をごく簡単にご説明致しましょう。

検索はまず、図１のようなSearch screenから始まります。上段のSearch EntryにまずKeywordを記入しますと、下段のResultsにヒット数が示されます。図１は「automobiles and ford」というkeywordで、24件ヒットしたという例です。

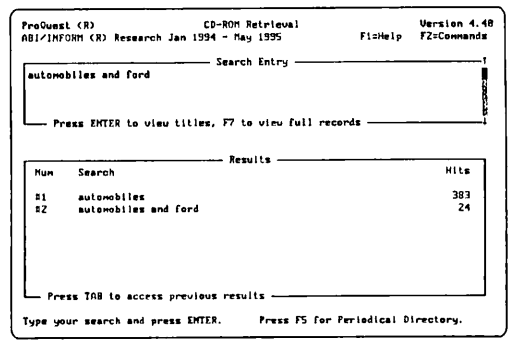



図１

さらに、ここでENTERを押すと図２のようなtitles画面が、Ｆ７を押すと図３のようなfull records画面を見ることができます。

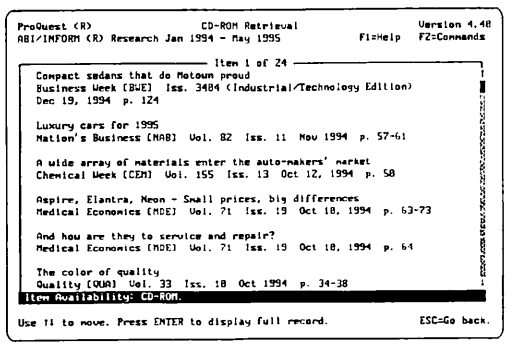



図２

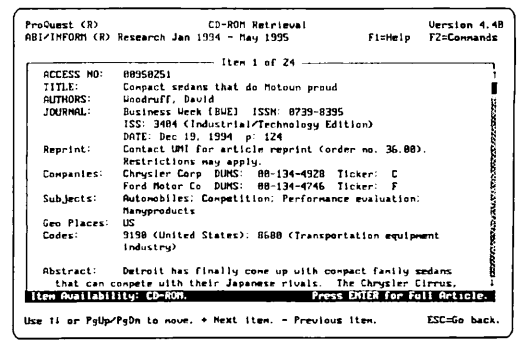



図３

必要に応じて検索結果を印刷したりフロッピーにセーブすることができます。なお、ProQuestでとくに重要なkeyは「Ｆ２」で、ここを押すとNew Search、Print、ExitなどのCommands windowが開きます。また、こうしたKeyword検索以外に会社名や雑誌名などのディレクトリ検索もできます。詳しくは、添付のマニュアルもしくは画面上の表示やHelpなどを参照してください。

# 平成8年度卒業者の就職状況について

平成8年度卒業者の就職状況は次表のとおりです。

昨年度については、景気回復が告げられる中、スタートした就職活動も決して優しい道のりではありませんでした。

本学においても、情報処理産業等の求人が幾分増え、「氷河期」からの脱出が見込まれたものの、秋期には内定率のペースも足踏状態となり、昨年同様厳しい展開となりました。

しかし、就職委員会の先生方をはじめ、諸先生方の努力とご協力により、平成8年度も前年度同様の成果を残すことができました。

平成9年度は、通信教育部生及び大学院生の一期生が就職活動を迎える年でもあり、依然学生にとっては試練の年になると思われますが、就職課ではより一層の努力とご協力を求め、是非、今年度も実りのある一年にしたいと願っております。

四年生の皆さんも、今一度気持ちを引き締め今年度の就職活動に臨んで頂きたく、健闘をお祈りしております。

■ 平成9年3月卒業者就職状況

| | 経営学科 | 情報学科 | 計 |
|---|---|---|---|
| 卒業者数 | 124 (17) | 105 (21) | 229 (38) |
| 就職希望者 | 96 (13) | 96 (20) | 192 (33) |
| 就職決定者 | 83 (12) | 93 (20) | 176 (32) |
| 就職未決定者 | 13 ( 1) | 3 ( 0) | 16 ( 1) |
| 内定率 | 86.5%<br>( 92.3%) | 96.9%<br>(100.0%) | 91.7%<br>( 97.0%) |

■ 業種別就職状況

| 業種 | 経営学科 | 情報学科 | 計 |
|---|---|---|---|
| サービス業 | 6名 ( 7.2%) | 12名 ( 12.8%) | 18名 ( 10.2%) |
| 情報産業 | 9名 ( 10.9%) | 34名 ( 36.6%) | 43名 ( 24.4%) |
| 卸・小売・飲食 | 44名 ( 53.1%) | 22名 ( 23.7%) | 66名 ( 37.5%) |
| 製造業 | 3名 ( 3.6%) | 6名 ( 6.5%) | 9名 ( 5.1%) |
| 建設業 | 7名 ( 8.4%) | 4名 ( 4.3%) | 11名 ( 6.3%) |
| 運輸・通信 | 1名 ( 1.2%) | 6名 ( 6.5%) | 7名 ( 4.0%) |
| 金融・保険業 | 6名 ( 7.2%) | 3名 ( 3.2%) | 9名 ( 5.1%) |
| 公務員 | 6名 ( 7.2%) | 3名 ( 3.2%) | 9名 ( 5.1%) |
| その他 | 1名 ( 1.2%) | 3名 ( 3.2%) | 4名 ( 2.3%) |
| 合計 | 83名 (100.0%) | 93名 (100.0%) | 176名 (100.0%) |

平成9年3月31日現在

## ◆◇ 教職員の動向 ◇◆

### ☆ 大　　学 ☆

◇教員人事◇

３月31日付退職
　教授　菊地　平明（定年）

４月１日付採用
　特任教授　菊地　平明

４月１日付発令
　学生部長　教授　角井　　穆
　教養課程主任　教授　奥平　　卓
　経営学科主任　教授　長井　敏行
　情報学科主任　教授　西辻　　昭

◇職員人事◇

３月31日付発令
　事務局長付を解く　　勝田　　孝

４月１日付
　総務課長　勝田　　孝

４月１日付採用
　事務局教務課　　佐藤　正英
　通信教育部事務部　吉岡　慎也

### ☆ 法人本部 ☆

◇職員人事◇

１月31日付退職
　総務課　可野　文一

４月１日付採用
　総務課　松尾　俊樹

## ◆◇ 12月～３月主要行事 ◇◆

### ☆ 大　　学 ☆

12月13日(金)　教授会
　　27日(金)　仕事納め
１月６日(月)　新年交礼会
　　17日(金)　教授会
２月14日(金)　教授会
３月１日(土)　地域情報化シンポジウム
　　（江別市・情報大共催）
３月７日(金)　教授会
　　14日(金)　教授会
　　18日(火)　第５回卒業式

### ☆ 通信教育部 ☆

12月16日(月)～20日(金)　後期放送授業科目試験
12月16日(月)　第３回入学選考
１月９日(木)～12日(日)　後期印刷授業科目試験
　　16日(木)～18日(土)　地方スクーリング
　　20日(月)　第４回入学選考
　　24日(金)～26日(日)　地方スクーリング
２月12日(水)～14日(金)　冬期スクーリング
　　17日(月)　第５回入学選考
３月10日(月)　第６回入学選考
　　28日(金)　第７回入学選考

## ◆◇ 広報活動 ◇◆

12月　高校訪問（道内）
12月14日(土)　一般入試説明会（仙台）
１月　高校・予備校訪問（札幌地区）

## ◆◇ 主な来校者 ◇◆

１月27日(月)　放送大学学園事務局長　他１名
２月14日(金)　韓国ピョンヤン国立大学
　　ミヤン・キョ・リ教授　他２名
３月７日(金)　文部省情報処理室長　他２名

## 編集後記

昨年はＮＨＫの大河ドラマ「秀吉」が話題を読んだ。この秀吉の弟に「秀長」という人物がいる、もともと武士ではなかった。田舎で農業に精を出していた処を秀吉が無理に頼んで武士になってもらうのである。秀吉は弟に約束をする、自分が出世して得たものは１割を授けるというものである。それは終生実行された。下克上の世であり、親、兄弟も誅殺することさえあった当時としては一種の美学のような気がする。秀吉は努力と実力の人であり、強運の人でもあった。常にある種の運に恵まれ自らの栄達を助けるのである。その最たるものが、「毛利責め」の一番乗りの権利を得た事であるし、織田信長が明智光秀に謀殺されたことなどであろう。堺屋太一は小説「豊臣秀長」で書いている。「運だけでもだめであり、努力と実力だけでもだめな場合がある。努力と実力と運があってこそ人は成功する可能性が広がる。」（趣意）春たけなわのいま、学校へ社会へと新しい息吹で挑戦する姿が報道されている。運のあるなしは誰にもわからない。しかし、約束を守ること、そして努力と実力は本人の気構えひとつである。その結果として運にも恵まれるのかもしれない。夢とロマンのない時代といわれて久しい、そんな現代を「秀吉」はどう見つめているのだろうか。（Ｓ）

北海道情報大学学内報
「ななかまど」第４号

発行日　平成９年４月１日
発　行　北海道情報大学
編　集　学内報編集委員会